



編集委員

インタビュー

情報の真偽見極め行動を

関西福祉大教授

勝田 吉彰さん(53)に聞く

かつだ・よしあき 1961年京都府出身。川崎医大大学院修了後、英オックスフォード大留学。臨床医を経て外務省入省。北京で新型肺炎(SARS)への対処を経験した。2012年から現職。



赤穂市、関西福祉大

エボラ出血熱「正しく恐れる」には？

エボラ出血熱が西アフリカを中心に猛威をふるっている。日本では感染者は確認されていないが、米国ではアフリカで活動した医療関係者に死者が出て、医療関係者の隔離など過剰反応も起きた。日本で感染する可能性はあるのか、「正しく恐れる」にはどうすればよいのか。外務省医務官として新型肺炎(SARS)に対処した経験を持つ勝田吉彰・関西福祉大教授に聞いた。

(田中伸明)

「西アフリカでのエボラ出血熱の流行に歯止めがかからない。」「多発しているのはリベリア、シエラレオネ、ギニアの3国。特にシエラレオネでは再び上昇カーブを描いている。もともと医師の数が極端に少ない上、医師自身も感染して倒れている。危険な業務への報酬も不十分で、医療機関は崩壊状態に陥っている。」「さらに迷信や流言が悲劇に拍車をかけている。白人がウイルスをばらまいている、病院に行くところを襲われる、といったうわさがまことしやかに流れている。啓発活動をしていく医師団が住民に殺害される事態も起きた。」「致死率の高さや症状の激しさが先進国でも恐れられている。」「西アフリカでの致死率は7割以上と報告されている。ただし、医療が崩壊している地域と先進国を同列に論じるのはおかしい。米国やスペインでも死者が出ているが、西アフリカに比べ致死率ははるかに低い数字だろう。」「エボラ出血熱の特徴や治療への過程は。」「猛烈な下痢や嘔吐で体の水分が失われる。バケツ単位で補液する必要があるが、生命を維持できれば最終的にウイルスと体の力関係が逆転し、ウイルスを撃退できる。全身出血が起きると生存率は下がるが、発症はシエラレオネで100人に1人程度という報告がある。多くても1割強だろう。」「米国ではアフリカ渡航者に対する過剰反応が見られた。」「米国にはパニックに陥りやすい国民性がある。ウイルス検査で陰性だった看護士を強制隔離した対応は行き過ぎた。日本人も米国人同様、パニックになりやすい。」「新型肺炎(SARS)が流行した際、北京にいた日本人の約7割が慌てて帰国した。フランス人は約3割だった。」「エボラ出血熱を正しく恐れるには。」「米国のケースが参考になる。感染者が地下鉄に乗って100人近く濃厚接触したとされるが、新たな感染者はゼロ。日本でも一般人に感染が拡大する可能性はゼロと言っている。感染は患者の体液に直接触れることで起こる。飛沫感染や空気感染は考えにくい。」「感染が疑われた際の対応は。」「フライバシーに十分配慮して

パニックが悲劇を拡大

ほしい。日本でも感染が疑われたケースでは、年齢などの個人情報報道されていたのが気になった。」「フライバシーが守られないと、感染の疑いのある人が申告しなくなる恐れがある。」「日本でも新型インフルエンザの流行が問題になった時、感染者が出た兵庫県立高校の制服の洗濯をクリーニング店が断ったケースがあった。感染の可能性は皆無だ。エボラ出血熱も(患者を受け入れる)指定医療機関の周辺住民が心配する必要はまったくない。正しい情報に基づいて恐れてほしい。」「西アフリカへの支援は。」「まずはアフリカに関心を持つてほしい。エボラウイルスの宿主はコウモリやサル。これらを現地住民が食べるため感染するが、捕獲を禁じるとタンパク源が失われる。流行の背景にはアフリカが抱える貧困などがある。」「近年、海外からの感染症が問題になることが多い。」「エボラ出血熱以外に心配な感染症がある。蚊を媒介して感染するデング熱やマラリア、チクングニア熱。重症化すると死に至る恐れがあるが、デング熱は日本でも今年、流行した。シンガポールやジャマイカでは流行を抑えるため国民的なキャンペーンを行い、蚊の駆除に力を入れている。日本でも2020年の東京五輪までに対策に本腰を入れなければ、世界の信用を落とすことになりかねない」

記者のひとこと

早くからパンデミック(世界的大流行)対策の必要性を訴え、新聞やテレビで精力的に発言する。取材の際は各国の防虫剤を示し、蚊の駆除の必要性を熱く語った。北京での経験が原点になっていると感じた。

神戸新聞

'14.11.23